
私、サイボーグになって現代に戻ってきました

窪まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私、サイボーグになって現代に戻ってきました

【Nコード】

N8261Z

【作者名】

窪まり

【あらすじ】

5年間、かずみと同棲した未来から来たアンドロイドにあうため自分の肉体を冷凍保存して200年後の未来に行った。彼女はサイボーグとして蘇った。200年後の世界は、どんな社会なのか不安と期待が入り交じる。だが、5年間、同棲したアンドロイドの正体を知って驚いた。そして、21世紀初期の現代に戻る。百合描写がありますので、苦手な方は、移動してください。

私、未来に行きました。

かずみ20歳は、200年後の未来から来たアンドロイド199Jpと5年間、同棲し百合関係を続けた。そして、再び時空の歪みが生じて、アンドロイド199Jpは未来へ帰ってしまった。

かずみは25歳になり、はじめて性風俗デビューすることになった。そして5年後、30歳になったとき、奇跡的に宝くじで1億円が当たり、自分の身体を冷凍保存するために渡米した。

大量の睡眠薬を飲み自殺した。遺書には、「私が死んだら、わたしの身体を200年後の未来になったら、再生できるように冷凍保存してほしい」という内容だった。

かずみが再生されたとき、冷凍保存のため脳だけしか再生できる細胞がなく、身体全体が人工有機？で構成されたサイボーグとして蘇った。

今までアメリカの某ホテルの部屋で寝たと思ったら、目が覚めたとき、周囲は見たことないような風景だった。周囲には見たことがない白い箱（たぶん機械）がたくさんあり、空中にいくつものスクリーンが映し出された。かずみは自分は、ついに念願の200年後の未来に来たと喜んだ。

「アンドロイド199Jpに会いたい」と心の中で願った。

周囲にはいろんな人種の人たちが、肌に密着するような白い服を着ていた。現代人から見れば、異様なデザインである。

かずみは、ある程度までなら英会話でき、英語も聞き取れるが、かずみの周りにいる人は、なに言っているのか理解できなかった。

「おっはー。ようこそ」と英語で話しかけられた。

褐色の肌の女性が、かずみの手を取った。そしてゆっくり立ち上がった。

「あの今は西暦何年ですか？」と英語で訪ねた。

褐色の肌の女性は、かずみの英語が理解できないので、もう一度、ゆっくり話しかけて欲しいような雰囲気でした。褐色の肌の女性は、ペラペラした薄い紙ディスプレイをもってきて、指で質問を書いて欲しいような仕草をした。

かずみは、指で英語で「今、西暦何年？」と書き、それを呼んで褐色の肌の女性は、ディスプレイに「西暦2197年」と書き記した。

「やったー！ついに未来に行けた」

2000年近く死んでいたので、全く夢がない睡眠のようだった。アメリカの某ホテルのベットで寝たと思ったら、目が覚めたら、一瞬で周囲は、理解できない物ばかりだった。

「私、アンドロイド199Jpに会いたい。どこにいるの？」と尋ねたら、

褐色肌の女性は「あなたがアンドロイド199Jpです」と言われた。

実は、かずみそのものがアンドロイド199Jpになっていた。

かずみの希望どおりに、かずみの身体は冷凍保存され、2197年のある日、理想的な身体として蘇った。身長はやや低く（170センチから165センチ）なり、顔も女つぽい顔になった。髪の毛が長くなり、ある日本人アイドルの顔をモデルにした顔になっていた。とてもかわいらしい顔になっている。

全身を映す鏡をみて、自分の姿を見て、うっとりした。

「肌がすべすべ。ツルツルしている。この辺にいた女子高生よりもきれい。スタイルも顔も理想的。まさに芸術！」と喜んだ。

元々スタイルが良かったが、もつと理想的な身体になり、バストが大きくなり、ウエストがより細くなった。顔とスタイルが変わった。何か違和感を感じると思ったら、自分の身体に性器も肛門もないことに気がついた。

かずみは、そのことについて悲しんだ。性器がないことはオニイができない。

肛門がないから食事もお酒も飲むことできない。

あの5年間の生活は、実は自分自身とのエッチな行為だったと思った。

「あの5年間は、私そのものとエッチな事を毎日していたのね。どうりで私の趣向を上手く読み取っているから、良くできたアンドロイドだと思ったが、実は私の脳で動くサイボーグだったのね」

「遅かれ早かれ、再び21世紀の私が住んでいたアパートの部屋に

戻る。私、自身との百合関係が始まるのね」

「でも、食事もできない。お酒も飲めない。性器がないからオナニーもできない。これから私はどうするの？」と悩み、

褐色肌の女性に、食事とお酒について尋ねた。

彼女はペラペラした紙ディスプレイを持ってきて、「逆に無駄が省けて合理的。食事をしたいと思つたら、サーボーグ用のガムを噛めばよい。脳に美味しい味と満腹感をあたえるから。お酒が飲みたければ、コンローラーでお酒飲んだ気になれる」と21世紀の英語、褐色肌の女性にとっては古い英語に訳された文字がでてきた。

かずみは日本語で自由に会話したいと思つた。

少し恥ずかしそうな表情で、かずみは褐色肌の女性に尋ねた「オニーは、どうしたら良いの？」褐色肌の女性は「時間の無駄。もつとこの社会には楽しいことがある。でも、どうしても性的快感を感じたいなら、バーチャルリアリティセンターに行けば脳を刺激してオニーよりも気持ち良いことができる。また、なりたい自分になれる」と言った。

いずれ、もとの私のアパートに行く宿命がある。確実に、私自身との再会がある。未来社会の生活に慣れる必要がある。どんな社会なんだらうか期待と不安が入り交じった。

私、バーチャリアリティを体験しました

22世紀の未来社会の娯楽は、バーチャルリアリティである。個人の妄想をリアルに体験することができるのである。

だが22世紀の社会では、人間は異様な服装をしていた。そして、アンドロイドや全身がサイボーグになった人は、街中でも全裸である。かずみは何でもいいから服を着たいと思う。全裸で歩き回るには、恥ずかしい物があるから、せめてショートパンツとタンクトップが着たいと思った。

でも、頻繁に全裸の美女や美男が歩き回っているので、次第に目が慣れてしまった。

バーチャルリアリティセンターへ歩いて行ったが、どんなに歩いても足が疲れない。外はとても寒く、他の人は白いつなぎのような服装であるが、息が煙のように凍っている。零下10度である。

全身をサイボーグにした人には、なぜ服が必要無いのか、それは感覚遮断を意識的に行うことができるのである。だから寒さを全然感じない。かずみも、不快な感覚を意識して遮断することができるのである。

かずみは、サイボーグ食を食べた。カレーライスを食べたいと思ったら、サイボーグ食から美味しいカレーの味がしてきた。口の中が温かく感じる。サイボーグ食は本来は脳だけに栄養と酸素を送るだけの食品だが、味覚を自由にコントロールすることができるのである。カレーライスの味だけでなく、考えるだけで、ビーフシチューの味もするし、何度も噛むほど、満腹感を感じるのである。

歩きながらサイボーグ用のガムを噛みながら、バーチャルリアリティセンターに到着した。

かずみは、未来社会は高いビルがあつて、そら飛ぶクルマが空中を移動しているのを想像したが、22世紀末の未来の風景は、ほとんど低いビルがあり、白っぽい建物が多く、やたらと樹がたくさん生え、寒い季節なのに、きれいな花が咲いている。造花だと思つたら、本物の花なのである。

かずみが未来に来てから3ヶ月後、12月の未来都市は、とても寒かつた。

全裸で歩くと、変な感覚だが、かずみの他にも全裸の美男・美女がいるので、次第に慣れてきた。

早速、アイドル顔になった私（アンドロイド199Jp）、かずみはロリっぽい女の子とエッチな事することを体験した。

周囲の景色が、21世紀初期のかずみが住んでいた街の風景になり、そこで自分の妄想に集中すると、自分が想像したロリっぽい顔の美少女とであつた。

「どこかラブホテルでもないかな」と考えたら、周囲は急に現代風のラブホテルになり、早速、ロリっぽい顔の美少女の服を脱がせ、エッチな事をした。

それを16時間連続で行うと、急激な睡魔に襲われ、全く夢のない睡眠に至る。

気がついたら、かずみはバーチャルリアリティセンターの床で、3時間ほど熟睡していた。全く夢が無い、とても深い眠りだった。

かずみは「確実に、私はアンドロイド199Jpとして、20歳のときの私かずみのところに戻る運命かずみ」だと思った。

私、砂糖でできた美少女人形なの（前書き）

しばらく、書き込んでなかったので、短くても連載を続けたいと思います。

今後もよろしくお願いします。

私、砂糖でできた美少女人形なの

かずみが会いたがった、アンドロイド199.jpgは、かずみ自身であった。

かずみは、数年間、むさぼるようにサイボーグ食を食べ続けた結果、酸素と糖分を供給しない状態で5年半もつような身体になった。だから水中でも真空中でも生活できる身体になったわけである。

突然、火星開発事業の仕事のオフアールがあったとき、自分の運命が変わると思って、残念に思った。いつまでたっても時空の歪みが起きないからである。

月面や火星の場合、人間が行く必要がなく、ほとんどがアンドロイドか全身サイボーグ化した人のみである。

火星を数万年後には、地球と同じ環境にするために、火星開拓と称して、火星の表面に氷点下でも育つ藻を植える作業を行うことである。

サイボーグになった、かずみは、月面基地に向かうロケットに乗ろうとした直前、大量の酸素と脳の栄養である糖分を補給していた。そのとき時空の歪みが生じた。

太陽よりも明るい光が差し、かずみはそこに吸い込まれた。

そして、2006年の自分のアパートの窓に到着した。全く謎である。それも都合良く、自分の部屋に行くなんて。

そこにいるのは、20歳の かずみである。

サイボーグになった、かずみから見ると、とてもおとなしそうな少年のように見えた。

自分で自分の顔をみるのは変な気分である。それも写真でも鏡でもなく、直に自分の顔をみるのであるから。

「わたし、5年半分の酸素と糖분을補給したまま自分が住んでいた部屋に戻ったわ」と思った。

「わたしの本当の顔って、とてもボーイッシュ。なんだか、とてもおとなしそうな少年そのもの」

そう思ったとき、20歳のかずみが、いろいろ話しかけて来たが、無意識に「私の稼働時間は、50075日」としゃべった。

目の前には、飲み物や食べ物があるが、それを口に入れる訳にいかない。

食べられるのはサイボーグ食のみである。

5年半分の酸素と糖分では、身体のほとんどを占めている。それが無くなれば皮だけスカスカになる。

『私の身体は、酸素と糖分でできている動く人形なんだ』と思った。

『砂糖でできた美少女人形なんだ』物理的に考えればそう思う。

かなり密度が高い未知の物質できていると考えられる。現代科学では解明できないもので、アンドロイド199Jpはできている。

そして、20歳のかずみによって、お風呂に入れられ、そして20歳のかずみに愛撫された。

「なんだか、とても大人しそうな男の娘に抱かれているみたい。20歳の、わたしってこんなに身体が硬い。だから性風俗をしても、リピーターが来ないわけだわ」と思った。胸の膨らみもほとんど無く、身体には、ほとんど弾力がない。抱かれても、まるで痩せている男性に抱かれたような感覚である。

初めて自分で自分の身体を抱かれた感覚を体験した人類最初の人間、それが、サイボーグになった、かずみである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8261z/>

私、サイボーグになって現代に戻ってきました

2012年1月3日04時52分発行